

港湾都市・群山(ゲンサン)の成り立ちを
日韓の視点で解き明かす

ムン・ジウンさん



都市環境学専攻
博士課程

ムン・ジウン(MOON JIEUN)さん

神戸で行われた仁川と神戸の港湾都市に関するシンポジウム。日韓両国の先生たちの間で会場からの質問に答える。



2016年、群山(ゲンサン)での現地調査の際、群山市・群山大学主催のシンポジウムで西澤先生の通訳を務めた。群山市民も多く、自分たちの都市についての日本人学者の見解に関心が集まったとムンさん。

韓国の近代建築史を研究するため、名古屋大学で学ぶムン・ジウンさん。およそ近代と位置付けられる19世紀末から1945年は韓国にとってはその大半が、日本の植民地時代。本国ではあまり触れられることのない時代の都市と建築を、韓国と日本の関係のなかで掘り起こしたい。そこで、都市環境学建築系の西澤泰彦教授につたない日本語で、「行きたいです!とメールしてしまいました」とムンさん。西澤先生の近代建築についての豊富な知識と、楽しく充実した研究姿勢に刺激をもらいながら、名大での研究生活は3年目を迎えた。

今は、植民地時代に、日本に米を送るために港が造られた「群山」という都市について、1899年の開港から1945年の解放、さらにその後1970年代まで、どのように都市が変化したかを研究テーマとしている。「歴史上は19世紀末の不平等条約に基づく開港で造られた都市ですが、実際には、そこに住んでいた人たちがまちづくりに関わっていたことがわかってきた」とムンさん。「都市というのは、そこに人間が住んで、過去から未来へ続いている。だから人と都市の事象を一つずつ解き明かすのは、パズルをみつけるみたいに楽しい」。将来の夢は「まずは博士論文」というムンさんだが、日・韓両方の視点で、その差異を伝えられる研究者を思い描いている。

編集後記

環境学研究科に生態学講座が開設されたのを機に、「生物を知る意味とは?—環境学と生態学」という特集を組みました。生態学の分野で活躍されている先生方に鼎談していただくとともに、異分野でご活躍の先生方にもご自身の専門と生物を関連づけて執筆していただきました。鼎談をお聞きして、「生態学は生物の生態を探る生物学の1分野であるとともに、生物とそれを取り巻く環境との相互作用を扱う学問分野でもある」ことを、恥ずかしながら初めて知りました。また、編集を通して、環境学研究科の裾野の広さを改めて実感しました。生態学講座を迎えた環境学研究科は、今後ますます社会に必要とされる存在になっていくでしょう。最後に、この場をお借りして、お忙しいにもかかわらず登場・執筆していただいた先生方と学生の皆さんに御礼申し上げます。(三村 耕一)

環 KWAN

名古屋大学大学院
環境学研究科

vol.36 2019年3月

【環・36号 広報委員会】

三村 耕一(環36号編集委員長)
角皆 潤 (広報委員長)
上村 泰裕
勅使川原 正臣

白川 博章 編集/編集企画室 群
中野 牧子 デザイン/オフィスYR
西澤 泰彦